



TITLE:

支那の社會の固定性

AUTHOR(S):

矢野, 仁一

CITATION:

矢野, 仁一. 支那の社會の固定性. 經濟論叢 1925, 20(2): 369-392

ISSUE DATE:

1925-02-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128249>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京 叢論濟經

號二第

卷十二第

行發日一月二年四十正大

論叢

相續税の能力原則上の弱點……………法學博士 神戸 正雄

社會學と現象學……………文學博士 米田 庄太郎

倫理と經濟との關係……………法學博士 財部 靜治

時論

支那の社會の固定性……………文學博士 矢野 仁一

小作問題と朝鮮の小作制……………法學博士 河田 嗣郎

說苑

貨幣の對内及び對外價値の變動
と貿易並ひに爲替との關係を論ず……………經濟學士 谷口 吉彦

雜錄

再び西陣の機業仲間について……………經濟學博士 本庄 榮治郎

海運同盟の研究に關する……………法學士 小島 昌太郎
參考資料に就いて……………

時 論

支那の社會の固定性

矢 野 仁 一

一

支那の社會は大體に於て士と庶民とに分かれて居る。これは昔から今日まで餘り變りがない。士の元來の意味は事と云ふことになつて居る。官に仕へ公事に服し、世祿に衣食した貴族階級であつた様である。春秋戰國以來周の禮制が維持されなくなり、たゞ孔子の如き聖人が出で、最早や天子の制度として維持されなくなつた禮樂或は教育などを、學問或は教養として維持しやうとして、茲に儒教と云ふものが生まるゝことになつた。即ち儒教は制度として維持されなくなつた三代の禮樂教育を、學問或は教養として維持する爲めに起つたものと考えることが出来る。昔は學校は士以上を教育する官學であつたが、春秋戰國以來それが衰へて、志を高く持し道を學ばんとする徒は、孔子などの門に集まり、私學は官學に代る様な有様となつた。官學は士以

上の貴族學校であつたが、私學は必ずしも世官世祿の卿、大夫、士の子弟のみ之に就くに非ず、庶民でも之に就くことが出来、庶民でも學に就けば之を士と稱することが出来る様になつたから、庶民士となるの途は新に開かれた譯で、制度としては非常な變化と言はなければならぬ。然し庶民は庶民として治むるものとなつた譯ではなく、庶民は士の必要資格である學問に依つて士の資格を得て、治むるものとなつたと云ふに過ぎないから、制度としては非常の變化であるが、實際に於てはどれ程の變化もなかつた様に考へられる。

當時政變に伴ひ、或は權力爭奪に伴ひて、權門勢家の地位に頻りに榮枯盛衰の變化が起つたことは、苟くも政變あり、權力爭奪ある以上は、必ず有るべきことであつて、何も社會革命など、考ふべきものではない。王侯將相寧ぞ種あらんと言つて、傭耕者の群から崛起した陳勝の如きものもあつたが、それで威張らうとしたわけ、王侯將相は種があるものゝ様に考へて居た當時の社會狀態は想像されるのである。陳勝が自ら詐つて、秦の公子扶蘇、楚の將項燕と稱したと云ふこと、范增が項梁に對し、陳勝の自立して、楚の後を立てざるを以て自滅の道なりとして、楚の懷王を擁戴すべきを説きたること、當時六國の後と言はなければ人心を服することが出来なかつたと云ふことは、當時どれ程も社會狀態に變化があつたと考へられない證據である。

漢の高祖は泗上の亭長と云ふ一賤吏より身を起して皇帝となり、所謂從龍の諸臣には、極めて

卑賤な吏胥或は徒卒より身を起したのも多かつたが、それもさう云ふ政變の場合には何時でも起る現象で、それだから支那到る處にさう云ふ地位の轉倒があつた様に考へるのは誤りである。當時沛縣以外にどれ程の社會的變動があつたとも思はれぬ。

漢以來、三老、嗇夫、掾史の如き吏胥から丞尉、守令の如き官になることが出來たことも、三代以前に府史、胥徒の如き庶民の官より下士、中士、上士となることが出來たのと變りがない。それも吏胥より官となることは、後世の様には六かしくなかつたと云ふだけで、原則として出來べきことではなかつた。士と庶民とに分かれて居る社會の状態には變りがなかつた。

支那の歴史に於て、もう一度世の替り目とも思はるゝ時代は、六朝から隋唐にかけた時代である。六朝時代は望族世家の政治上社會上に重きを爲した時代で、下品高門なく、上品寒士なしと言はれた程であるが、隋以來科舉試験で士を取ると云ふ制度が始まり、唐宋に至りそれが益重んぜられ、士は皆譜牒を投じて試験に就くと云ふ有様になつたので、五代の亂を経て譜牒は散佚して仕舞ひ、士は科舉試験に依つて、譜牒の眞僞に拘はらず、社會上に重きをなす様になつた。此の如く門地身分の如何に拘はらず、科舉試験に應じ、及第したものは社會上に重きをなすに至つたと云ふことは、是亦制度としては、非常の變化と言はなければならぬ。然しそれは制度の上に於て庶民でも士となることが出來ると云ふ途を再び開いただけで、庶民が實際に士となることを

保障した譯でもなく、また庶民は庶民として治むるものとなつた譯でもない。只だ庶民も學問に依つて士の資格を得ることが出來、士の資格を得ることに依つて治むるものとなるべき途が開かれたと云ふに過ぎない。實際に於て望族世家の譜牒が權威を失つても、望族世家が更に新しい科舉試験の制度に依つて、士となり官となる機會が、庶民と比較にならぬ程多かつたことは明かで、どれ程も望族世家以外、殊に士流以下の庶民の階級から、科舉試験に應じ、或は應じて及第したものがあつたかは疑はしい。

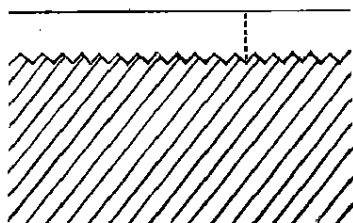
五代の時に後唐の莊宗は、盧程と云ふものが、名族の出であるに拘はらず、無學にして文書を草することも出來ない程であつたから、之をさしおいて五代無節義者の標本として通つて居る馮道を用ゐて書記としたことがあるが、此の時盧程は門閥で人を用ゐずして、田舎兒を先きに用ゐる法があるかと言つて大に恨んだと云ふ話はある。宋の時には既にさう云ふ話はなくなつたけれども、私譜が盛んに行はれたと云ふことは、其の事自身、望族世家の勢力が猶ほ間接に繼續して居た證據と考へることが出来る。さうして見れば六朝から唐宋にかけて世の替り目も、非常な替り目ではない。士と庶民とに分かれて居る社會の状態には矢張り變りがなかつたのである。

此の如く春秋戰國から秦漢にかけて時代も、六朝から隋唐にかけて時代も、支那の社會組織、支那の社會狀態に革命的變化を齎した様な時代ではないのである。

さう云ふ譯で支那の社會は昔から士と庶民とに分かれて居ると考へることが出来るのである。士は知識階級であり、同時に治者階級である。或は知識階級であるが故に治者階級であると言つた方が適當かも知れない。士紳即ち讀書人或は所謂政客であつて政治を遊戲とし或は政治を職業とする階級である。庶民は之に反して無識階級であり、同時に被治者階級である。無識階級なるが故に被治者階級であると言つた方がよい様な階級で、農、工、商を業とし、政治には毫も關係せず、又毫も政治に對して興味を持たないのである。さうして支那の人民の大多數は庶民であつて、士の階級に屬するものは、之に比較すれば、極めて少數に過ぎない。

それ故支那を一の社會として考ふれば、政治に關係なく、政治に興味を有せざる大多數の人民は社會の内部を構成し、其の極めて表面の部分に於て、少數の人民は政治を遊戲とし或は政治を職業として活躍して居る様なものである。猶ほ此の表面の一部分或は一隅に於て政治に反抗する不良の匪民が跳梁して居ると考へれば、一層よく支那の社會の真相を盡すことが出来る様に考へられる。此の不良の匪民は政治が善いとか、政治の力が強いとか云ふ場合には引込み、政治が悪いとか、政治の力が弱いとか云ふ場合には出て來ると云ふ分子である。支那の歴史は此の社會の表面の部分に於て政治を遊戲とし或は政治を職業とする分子間の政權爭奪の歴史、或は此の分子

と之に反抗する分子との政權爭奪の歴史である。支那の社會の内部は其の表面と接觸する部分に於て多少の動搖影響を免れざるも、實質に於ては殆んど影響を被ぶらないと言つてもよいのである。それ故若し圖を以て支那の社會を示せば、内部と表面との分界線は波線を以てすべく、表面



に於て政治を遊戲とし或は政治を職業とする部分と、之に反抗する部分との分界線は、政治の善惡強弱に依つて移動することを表示する爲め實線を以てせずして虚線を以てすべきものであらう。實際に於ては政治に關係せず、政治に興味を有せざる所の人民も、政治に従事し政治に興味を有して居る所の士紳或は讀書人或は所謂政客も、政治に反抗する不良の匪民も到る處に混住雜居して居るのであるから、表面此の如く截然たる分界が認めらるゝ譯でないけれども、深く支那の社會を省察すると、かう云ふ分界があり、又かう云ふ分界があるものとして考へると、支那の社會はよく分かる様に考へらるゝのである。

三

支那の大多數の人民は政治は善いから之に依頼するとか、政治が悪いから之から離るゝと云ふのではなく、政治と云ふもの其の物を無用のものと考へて居る様である。臺灣の人民が日本の政治を不止費氣と言つて、ひどく煩擾がつて居ると云ふことである。支那の人民の政治に對する考

へを示すものである。彼等は政治に依つて自分達の利益を保護して貰うと云ふ考へがないから、政治は必要でない、租税を取らるゝだけ、必要でないよりは却つて悪い様に考へ、成るべく之を逃避し之から遠ざからうと云ふ心持になつて居る様である。政治を不必要と考へると言つても、無政府主義者の様に、積極的に進んで政治を否認し、積極的手段に依り、政治と云ふものを無くして仕舞はうと努力するのではない。さう云ふ積極的の考へ、積極的の努力は、單に自分の利益さへ保護さるればよいと云ふ極端の利己心のみでは出来るものではない。社會全體の利益、人民全體の利益と云ふことを考へなければ出来ない筈である。然るに彼等は單に自分の利益さへ保護さるればよいのであるから、進んで積極的に政治をなくして仕舞はうなど、は考へない。況してそんな努力はしない。少數の人民が、政治を遊戲とし、或は政治を職業として、善い政治をなし、或は悪い政治をなし、又は政權の爭奪をなしても、それはなすに任せて、自分は只だ其の影響、其の禍害を成るべく被ぶらない様に、被ぶつても之を最小限度に止むる様に、之から遠ざかり、之から逃避せんとするのである。

政治が善いとか、或は政治の力が強いとか云ふ場合に引込み、政治が悪いとか、或は政治の力が弱いとか云ふ場合に出て來ると云ふ分子は、匪盜棍徒の様なもので、若し政治と云ふものが無い様になれば、匪を懲して良を安んずると云ふことが出来なくなり、大多數の人民は、かう云ふ

分子の爲めに損害を被ぶり、劫掠の禍に罹らなければならぬ様にも考へらるゝが、彼等はそれは政治の害と餘り變らない様に考へて居るのである。彼等は政府の課税と云ふものも、匪盜の劫掠と云ふことも同様に考へ、政治がある爲め之に對して租税を納むるは、土匪群盜あるが爲め之に對して貢納金或は贖身銀を拂ふことゝ格別違ひがない様に考へて居るのである。政府に對して租税を納むると云ふことは、政治を不必要と考へて居る人民に取つては、政治に依つて利益を保護して貰う代りに、義務として納むると云ふ意味ではなく、政治の掠奪を免れる爲め或は政治の損害を少くする爲め、換言すれば政治を避くる爲め慰撫の意味で之を拂ふに過ぎないのである。それ故政治が無ければ無いで、匪盜棍徒などの掠奪を免るゝ爲め或は其の損害を少くする爲め、之に貢納金或は贖身銀を拂へばよい、同じことであると考へて居るのである。

桑原博士の近著、宋末の提舉市舶西域人蒲壽庚の事蹟に、岳珂の程史津逮秘書本に見わたる南宋時代に官の招撫を受け、歸順して官吏となつた福建の海賊鄭廣の佚事を引用されて居るが、鄭廣の前身が海賊であつた爲め、同僚の衆官は賤しんで交際しなかつたと云ふので、鄭廣は鄭廣有詩上衆官、文武看來總一般、衆官做官却做賊、鄭廣做賊却做官と云ふ詩を作つて衆官に示したと云ふことである。大變面白い話であるが、支那では官も賊も餘り變りがないのである。臺灣に汝去山我去官と云ふ諺があると云ふことである。少くも人民から見れば官も賊も餘り變りがなく、官から

取らるゝ租税も賊から取らるゝ貢納金、贖身銀も性質に於て格別の差がない様である。張作霖は滿洲で馮麟閣などゝ並んで馬賊の頭目であつたことは知らぬ人もない程である。山東土匪軍の頭目であつた孫百萬は青島游緝軍の司令官となり、河南老洋人部下の土匪なども國軍十二營に改編せられ、老洋人、張得勝、李明盛などの頭目は國の字を授けられて、それ〴〵張國信、張國威、李國治など、稱したことも近頃有名な話である。

四

支那人が平和的の人民である、平和を好む民族であると云ふことはよく言はるゝ話で、西洋人の著書にもよくさう云ふことが述べてある。日本の學者などにも支那の民族性を論じた人も少からずあるが、何れも平和を好むと云ふ性質を其の一つに擧げて居ない人はないのである。然るに支那には絶えず革命の騷亂が起つて居る。其の度び毎に随分慘酷な戰闘殺傷が行はれて居るのである。梁啓超は支那の二十四史は徹頭徹尾血肉狼藉の殺傷史であると言つて居る。平和を好む性質は支那の顯著な民族性の一であると云ふ人は随分此の説明には困るのである。それでこれは支那の人民が戰爭を好む爲めではない、却つて平和を好む人民であるから、政治上の弊害に對しても、或る程度までは耐へて居る、他の人民ならば耐へられない程度までも耐へて居るが、弊害がよくよく甚しくなり遂に耐へられない様になり、始めて已むを得ず革命の戰亂を起すに至るので

あると云ふ様に、説明にならぬ様な窮した説明を試みて居る人もあるのである。然し清朝の中頃に起つた白蓮教徒の叛亂とか、長髮賊の叛亂とか云ふものは非常な騷亂で、一方は五省九年、一方は十六省十五年に亘つて居るのであるが、白蓮教徒の叛亂は康熙、雍正、乾隆の仁政を受けた後に起り、長髮賊の叛亂は嘉慶、道光の後で、康熙、雍正、乾隆の仁政とは比較が出来ぬとしても、そんなに酷い堪へられない程の惡政虐政などはなかつた時に起つて居るのである。支那の人民は平和を好む性質であるが、惡政が耐へられない様になつて、始めて已むを得ず革命の戰亂を起したと云ふのでは説明が出来ないのである。清朝末の革命亂にしても、決して惡政が耐へられなくなつて起つた戰亂とは考へられないのである。然らば支那の人民の平和を好むと云ふ性質と、支那に絶へず起つて居る戰亂、殺傷の事實とを如何にして矛盾なく説明することが出来るであらうか。

私はこれは革命の戰亂とか其の他の騷亂とか云ふ様な事實は、支那の社會の表面に於て、政治を遊戲とし、若しくは政治を職業とする所の少數の人民、乃至政治に反抗し、政治が悪いとか、政治の力が強いとか云ふ場合には引込み、政治が悪いとか、政治の力が弱いとか云ふ場合には出て來ると云ふ様な匪盜棍徒の様なものとの間に起る所の事實であつて、大多數の人民の間に起る所の現象ではない、大多數の人民は成るべくさう云ふ戰亂とか騷亂とか云ふものゝ影響を被ぶら

ない様に、損害を受けない様に、成るべく迅速に戦亂、騷亂を通過せしめ、若しくは終息せしむる爲めに努力をなすに過ぎないと考へれば、説明が出来る様に思ふのである。

支那の人民は只だ自分だけさう云ふ戦亂、騷亂の影響を被ぶらない様に、損害を受けない様に、之を避け様避け様とする爲め、敢て之に反對し、又は阻止しない。反對又は阻止すれば損害を受けなければならぬ、損害を受けることは嫌だから反對又は阻止しない。其の爲めに彼等自身は損害を免ることは出来様が、戦亂、騷亂は容易に大きくなる。容易に平和は攪亂され、大局糜亂の形勢を馴致するに至るのである。私は支那程容易に平和の攪亂さるゝ國はなく、又支那程容易に平和の恢復する國もないと思ふのである。容易に平和が恢復すると云ふことは、又容易に平和の攪亂され、眞の平和の恢復せざる所以であるかも知れないが、兎も角直ぐちよつとは落着く様になるのである。平和は攪亂された儘に落着き、混亂狀態の儘に静止狀態となる様な形勢になるのである。武昌で革命の戦亂が勃發したのは明治四十四年即ち宣統三年八月であるが、一個月立つか立たぬ中に、十餘省は獨立を宣言し、恰かも革命軍は十餘省を取つた様な形勢になり、非常な大亂の狀態となつたのである。然しかう云ふ風に容易に十餘省は獨立を宣言した爲め、格別な騷亂はなくて済み、かう云ふ狀態の儘に落着いたのであつて、大亂と言へば大亂の儘に固まつて、平和が一先づ恢復した様な譯である。さうして翌年の二月には清朝の帝室が退位し、共和

政府は形だけでも兎も角も出來て仕舞つて、最早や格別の戰亂はない様になり、大亂狀態が終息したのである。亂るゝことも随分早い、治まることも随分早いのである。

段祺瑞氏や王正廷氏などは、餘り早く革命戰亂が治まり、革命主義を徹底せしむることが出來なかつた爲めに、其の後も絶えず内亂が起り、混亂狀態は續くに至つた様に言つて、革命の戰亂を早く治めてはならなかつたのに早く治めたのが惡かつた様に考へて居るけれども、私は早く治めてはならなかつたのに、早く治めたのではなく、早く治めなければならなかつたので、早く治めたのであると考へるのである。早く治めなければ當時の共和軍は必ず強いと云ふ譯でなく、必勝の形勢があつた譯でないから、時機を失し少しでも敗け色が立たうものならば、折角清朝に對して獨立を宣言した十餘省は、又革命軍に對して獨立を宣言するかも知れない。どつちでも形勢のよい方に轉じて戰亂、騷亂の影響損害を成るべく受けない様に、成るべく迅速に之をして通過し経過し進行せしめて仕舞はうとするのが、支那の大多數の人民の考へであるから、民心の歸趨はどう變るかも分からない、早く有利の地歩を占めて時局を收拾しなければならぬ必要があつたから、之を治めたので、其の外に途がなかつたのである。革命主義を徹底せしむるまで、革命の戰亂を早く治めない様にすると云ふ様なことは出來べきことではなかつた。

それで其の後も絶えず内亂が起つて居るが、又絶えず治まつて一時的の小康を得て居るのであ

る。最近四五年に起つた安直戦争でも、奉直戦争でも、昨年の直隸派反直隸派の戦争でも、日本の支那通などが、どつちが勝つだらうかと息を殺し片唾を吞んで心配して居る中に、さつさつと鎮靜して仕舞つたのである。今日では何時又平和が攪亂され、混亂狀態に陥るかも分からぬ様な不安定な平和ではあるが、兎も角平和狀態となつて居るのである。

此の如く支那は混亂時代と言つても、絶えず平和は起つて居る。さう云ふ譯で支那の社會に於ては、何時でも平和にならう平和にならうと云ふ様な力は力強く働いて居ると言つてよい様な有様があるのである。平和時代も混亂時代も支那に於てはたいした違ひはない様に思はれる。平和時代であつても、混亂、騷亂はない譯ではない。康熙、乾隆の様な平和な時代でも絶えず一時的、局部的の騷亂は起つて居る。只だ平和の大勢には關係がないから平和時代と稱するのである。混亂時代でも平和は絶えず起つて居る。只だ混亂に依つて平和は頻繁に中斷さるゝだけのことである。それだから支那の今日は混亂時代と言はなければならぬが、人民は自ら此の混亂狀態に満足して、安んじて生業に従事し、生活を享樂し、かう云ふ混亂狀態はかう何年も續いては仕方がない、何とかしなければならぬなど、あせりもがく様な有様は更にないのである。混亂狀態其のまゝが平和狀態の様な有様があるのである。

五

これはどう云ふことを意味するか。かう云ふ様に、亂れたり治まつたりしても大勢が常に平和にならう平和にならうとして居る様な傾きのあることは、支那の戰亂、騷亂と云ふものは、社會の極めて表面の部分の波瀾に過ぎざることを意味するものである。政治を遊戲とし、若しくは政治を職業とする少數の人民、乃至政治に反抗する不良分子の間の騷亂に過ぎず、社會の内部實質を構成して居る所の大多數の人民は、此の騷亂の影響損害を成るべく受けない様に、革命軍或は叛徒軍の勢ひが強い様になると、獨立とか、政府離脱とか云ふことを宣言して、少しも抵抗せず、此の騷亂をして影響を自分達の内部に及ぼさしめず、さつさつと表面だけを通して、經過して仕舞はしむる様にするのであるから、丁度波の進行する様なもので、騷亂の進行する有様を眺めて居ると、如何にも非常の大騷亂となつた様に見えるけれども、其の實支那の社會の内部は少しも擾亂されず、平和な靜止狀態を續けて居るのである。それ故騷亂が表面だけを通り過ぎて行つて仕舞へば、それと共に直ちに平和な靜止狀態となる譯である。

支那に於て容易に平和の攪亂さるゝのも、人民の此の無抵抗主義の爲めであり、又平和の容易に恢復するのも、亦人民の此の無抵抗主義の爲めであると考へられる。

前にも述べた様に清朝末の革命の時に、あつちでもこつちでも獨立を宣言し、一個月足らずの中に十餘省は獨立を宣言したのであるが、私はこれは十餘省の人民の無抵抗平和主義を意味する

ものと思ふのである。革命軍方では旬月ならずして十餘省を光復したなど、言つて居るが、何も十餘省の人民は革命主義を認め、革命主義を賛成して、革命軍に味方して政府軍に反抗すると云ふ様な意味はないのである。革命軍の攻撃侵害を免るゝ爲めの自衛手段として革命軍の反對敵抗しつゝある所の政府に屬するものでないと云ふことを宣言したものに過ぎないのである。政府軍に屬さなければ、革命軍に屬することになるではないかと言ふ人があるかも知れないが、若し革命軍に屬したとすれば、それは只だ政府軍に屬さない程度の屬し方に過ぎないのである。革命軍に屬し、革命軍と共に政府軍に敵抗すると云ふ様な屬し方ではないのである。獨立を宣言しない前には政府軍に屬した譯であるが、それも同様に革命軍に屬しない程度の屬し方で、清朝に屬し、清朝の爲めに革命軍に當ると云ふ程度の屬し方ではなかつたのである。さう云ふ屬し方であるから、どつちでもよいのである。政府軍の方が強ければ政府軍の方に屬し、革命軍の方が強ければ革命軍の方に屬し、無抵抗主義に依つて革命の騷亂を迅速に通過し進行せしめて、其の侵擾損害を極めて表面の部分に止まらしめ、内部に及ぼさしめない様にするのが支那人の考へであり、又其の態度であるのである。

六

支那人の無抵抗平和主義は昨年支那に起つた盧永祥、何豐林の兵隊置き去り事件でも證明され

る様に思はれる。それは盧、何兩人が蘇浙戦局の不利となりし結果、上海郊外に於て幾萬の軍隊を置去りにして突如日本に逃亡した事件である。私は昨年末福井縣の海岸で坐礁沈没した我が海軍船關東の艦長島野中佐が責任を一身に負ひ、部下をいたはり自分は艦と生命を共にせんとした悲壯な態度と比較して、其の責任感に於て非常に違うことを感ずるのである。盧永祥が若し最初に宣言した如く最後まで踏み止まり、最後の一人までも戦ふと云ふ決心をなしたならば、上海近傍は随分兵燹の慘禍に罹り、久しい間兵亂の巷となることを免れなかつたと思へられる。私共から考へると盧永祥は浙江などもう少し熱心に支持したならばと思はるゝに、實に未練なく抛棄し、浙江のことは浙江人に委せると言つて少しも執着しなかつた。日本人の様な態度を取つたならば、どつちが勝つか、どつちが敗けるか分からない様な戦局が永く續き、非常な激戦となり、それだけどつちに勝敗がつけば結局永久の安定は得らるゝかも知しぬが、一時は非常の激戦を免れなかつたことは明かで、それは支那の人民としては非常に困るのである。彼等としてはどつちが勝つてもどつちが敗けても構はない。永久の安定などが得られなくとも少しも困らない。初めより政治とか政府とかに依つて、どうかうしやうと云ふ考へはないのであるから、時局が安定しなくとも、安定した政府が出来なくとも困らない。只だ戦局が續き、戦亂の巷となり、激戦などが行はるゝと云ふことは困るのである。彼等は一意戦争なきを希望し、戦争に依らなければ時

局の安定が望まれないと云ふ場合にも、戦争までもして時局の安定を望まうとは思はないのである。支那の人民はかう云ふ心理があるから、盧永祥等が幾萬の節制なく食糧なき軍隊を置き去りにして遁げて行つたと云ふことは、彼が最後の一人までも戦ふなど、言つて踏み止まつて居るよりは、一時置き去りにした軍隊の爲めに非常に困る様なことがあつても、それは自分達でどうかして處置して仕舞へば、それだけ早く戦亂から免るゝことが出来、平和が早く恢復する譯で、其の方が餘程よいと考へて居る様である。日本などでそんなことをしたならば、盧永祥は二度と政治界に立つことは出来ない様になるであらうが、支那では日本程盧永祥を非難しない。上海總商會は無主の兵數萬人の食糧を給し、又其の解散費を負擔したのである。

又昨年の戦争に於て、馮玉祥と云ふ裏切者を出したのであるが、かう云ふ裏切者を出すと云ふことは、清朝末の革命戦亂以來支那の内亂を通じて起つて居る顯著な現象である。直隸派が勝つか反直隸派が勝つかとやきもきして見て居ると、ひよつくり裏切者が飛出して局面ががらつと變り、見當が大概外れて仕舞ふので、見て居るものに取つては大變面白い。私は清朝末の革命戦亂當時北京に居つたが、北洋第二十鎮の統制であつた張紹曾が兵を灤州に擁して、欽定憲法取消、民立主義憲法承認を強要した時と、段祺瑞が袁世凱の手先きとなつて、政府軍側の將軍四十餘人と聯合して、死を以て共和に反對すと云ふ電報上奏をなしてから、僅かに數週日の後に共和は大

勢の向ふ所であるから、今の内に退位せらるゝがよい、今の内に退位せらるれば、優待條件に依つて永く優待を受けらるゝことが出来る、これは清朝の厚恩を受けたる臣子の分として、清朝に對して最後の忠義を盡す所以であると云ふ意味の電報上奏をなした時ほど、ショックを受けたことはない。これで清朝は滅びたのである。私共から見れば、張でも段でも裏切者と思はれないが、支那の人民から見れば、自分達さへ始終向背を變へて居るのであるから、餘り悪いことは考へない様である。却つて民心の歸趨を察し、大勢に順應すると云ふことは、戰爭をなさずして早く平和に導くもので、自分達をして戰亂の影響損害を免れしむる所以であるから、却つてよいと考へて居る様である。

それから支那に於て武力統一と云ふことがひどく不評判になり、段祺瑞の武力統一も、吳佩孚の武力統一も皆失敗したと云ふことは、私は矢張り支那人民の無抵抗平和主義の爲めであると思へるのである。眞に武力があれば、實際に武力を用ゐずして統一の目的を達するのであるが、少しばかり武力があると云ふので、武力統一を標榜すると、或る程度の統一は出来るかも知れない。然しそれは武力を用ゐずして、武力統一を標榜したうけで統一の出来る程度の統一である。然し終には實際に武力を用ゐざれば統一が出来ない點に達するのである。さうすると勝敗は分かんなくなる。此の勝敗が分らないと云ふことは、既に武力統一を主張する方の弱點を示すこと

ゝなるのである。それでも武力を用ゐんとすると、必ず激烈な争闘は免れない。さうすれば人民の損害は免れないから、非常に不評判となる。無抵抗主義の人民の向背は變る様な形勢になる。武力統一は益々六かしくなる。革命軍が清朝末の革命戦亂當時、旬月の間に十餘省の光復をなし遂げたのは、革命軍の大成功である様に言つて居るが、これは殆んど武力で成功したのではない。愈々武力を用ゐなければならぬ點に達すると、勝敗は分からなくなる。少しでも敗け色が立つ様になれば形勢が變るのであるから、武力統一を棄てなければならぬことになり、共和政治などに毫末の理解もない袁世凱を大總統に推戴すると云ふ様な條件で、名ばかりの共和政府を協定して満足しなければならぬことになつたのである。清朝の方から言つても、武力で解決せんとすれば、必ず激烈な戦争をなさなければならぬことになる、武力解決と云ふことが非常に悪いと云ふことになり、資政院で激烈な反對があつたのみならず、清朝政府軍の武力を代表した段祺瑞までも、武力解決が悪い、大勢に順應しなければならぬと言ひ出す様になり、遂に之を抛棄しなければならぬことになつたのである。此の段祺瑞が共和政府の總理大臣になると、武力で譯もなく支那の統一が出来る様に考へるに至つたことも可笑しいが、矢張り實際に武を用ゐなければならぬ點に達して敗れたのである。吳佩孚の武力統一も、其の成功した所は武力を用ゐずして、單に武力を標榜したゞけで統一することの出来る部分を統一したと云ふに過ぎないのであつて、眞

に武力で統一しなければならぬ點に達すると、武力統一を標榜したことが邪魔になり、失敗して仕舞つたのである。

七

此の如く支那の大多數の人民は政治の影響を免れ、戰亂、騷亂などの損害を受けない様にする爲め、無抵抗主義に依つて、或は租税を豫納して政治の勢力を排斥し、或は獨立を宣言して、迅速に戰亂、騷亂をして其の表面の部分を通過して經過せしむる様に努力して居るのである。政治は善いから之に依頼して生命財産の安全を保護して貰はうとするのではなく、又政治が悪いから特に之から離れて叛亂に與し、革命軍に屬すると云ふのではない。政治に對して望む所は、生命財産の完全の保護などではなくともよいから、租税を成るべく取らない様にして貰ひたい、生命財産の安全を脅かす様なことをしないで貰ひたいと云ふに過ぎない。政治と云ふものに對して保護と云ふことを望まないことになる、政治は只だ租税を取り、生命財産の安全を脅かす外、何の効能もないものとなる。無用有害のものとなる譯である。それだから支那の人民は政治に全然興味を有せず、只だ政治を逃避すると云ふ考へになつて居るのである。

支那の人民が如何してかう云ふ考へになつたか。支那の政治が悪かつたから、人民は之に興味を持たない様になり、之から逃避せんとする様になつたものであらうか。政治が悪ければ、進ん

で積極的手段に依り、之が改善を圖り、或は之に反抗し自ら政治上の權力を取つて之を善くすると云ふ方法を考へてもよい譯であるが、支那の人民がそれを考へずして、消極的に之を逃避し之を防禦すると云ふ方法を考へたと云ふことはどう云ふ譯であらうか。それに支那の政治は必ずしも西洋諸國の政治に比して悪い政治であつたとは考へられないのである。さうすると、支那の人民の文弱であり、保守的退嬰的であることは、又其の民族性の一であると言つて、それでも擔ぎ出さなければ説明が出来ぬことになるのである。

私は支那の政治が悪かつたから、人民は政治に興味を持たず、之から離れ、之から逃避せんとする様になつたのではなく、支那の政治は徳治主義の政治で、其の及ぶに任せて、及ばざる所を無理に治め様としなかつた爲め、丸で政治が及ばず、其處に人民の自治が生じ、又支那の大家族制度の如きものが發達し、政治を必要とせざるに至り、政治上の保護を望まぬことになつた結果、終に政治を害惡視し、之を逃避せんとするに至つたものでないかと考へるのである。

随つて元の時代に蒙古人が支那を支配した結果、蒙古人若しくは支那人以外の外國人などが政治上重要な地位を占め、人民の利害休戚を念とせず、旱魃、飢饉、水害、疾疫などの場合にも、人民の疾苦に對して殆んど責任を感じせず、善政を施して人民を救済しやうとはせず却つて苛斂誅求、人民を搾取して私腹を肥やさうとしたので、これより後支那の人民は政治に依頼する考へを

棄て、政治の良否善惡を問はず、自分等の利害休戚は、自分等自身之に當らなければならぬと云ふ様な考へを持つことになつたと云ふ様な説もあるけれども、私は賛成し兼ねるのである。

成程義田、社倉と云ふ様な、官が世話を焼いて、飢饉の場合、若しくは米價騰貴などの場合に困難する人民を救済しやうとする様な設備は隋、唐、宋以來起つて居るのである。かう云ふものが起つたと云ふことは、當時未だ人民が官と關係を絶たなかつたと云ふこと、又人民自身官の保護に依らずして、自分達のこととは自分達で世話すると云ふ様な考へになつて居なかつたと云ふことの證據と見られぬこともない。然し元の時に政治が悪かつたから俄かに人民は政治に愛憎をつかすことになつたと云ふのはどう云ふものであらうか。五胡十六國の時代だつて、北方の方は矢張り他人種の支配の下にあつた。かう云ふ時に支那の人民が政治の保護恃むべからずとして、自ら自分達の利害休戚に對して責任を負擔する考へにならなかつたと云ふことも矛盾の様である。

昔支那の地方に於て教化、裁判、租税、警察などのことを掌つて居た三老、嗇夫、游徼と云ふ様な郷官は、隋の時以來廢されて、官と地方との聯絡が絶たることになり、其の結果として人民は政治から離れることになつた様に考へる説もあるが、隋の時までさう云ふ郷官があつたと云ふことも疑はしく、それは兎も角として郷官が猶ほ存してあつた様に考へられて居る隋以前に、人民は政治に親しみを持つて居たと云ふこともどうであらうか。彼等は政治に依つて生命財産の安

全を保護して貰はうと云ふ考へがあり、政治が悪ければ積極的手段に依つて其の改善を圖り、飽くまでも政治上の手段に依頼すると云ふ考へであつたと云ふことは考へられないことである。私は蒙古や五胡が容易に支那を征服することが出来たのは、既に支那の人民が蒙古でも五胡でもどうでもよいと云ふ考へがあつたからであると考へるのである。

私は支那の歴代、革命の戦亂が頻繁に起つて、頻繁に成功したのも、支那の人民が一日も早く革命に依つて生ずる混亂より免れたい様に考へて居る心持に投じた爲めであると考へる。

さう云ふ譯であるから、私は支那の人民が政治に興味を持たず、政治から逃避せんとする様な考へになつて居るのは昔からのことであると考へるのである。

八

支那の人民の平和を好む性質は、其の先天的民族性であると云ふことは一般に學者の唱へて居る所であるけれども、果してどうであらうか。

學者は支那の人民が先天的に平和を好む人民であることを證明する爲めに、孔子孟子の仁義を本とする平和説や、老子の虚無説、又戰國時代に墨子とか宋慳とか云ふ様な非戰論平和説を唱へて天下を周遊し、諸侯に説き國君に説くことに骨折つた人のあること、墨子宋慳ばかりでなく、戰國時代の諸子百家の説には随分非戰論平和説に向つて居る様なものゝあることなどを擧げて、

此等の説は支那人の平和を好む本來の性質から發したものであると論じて居るのである。成程これは支那人の戰を好むと云ふことを證明するものではないかも知れぬ。戰を好めるは國君であり諸侯であつて孔子、孟子、墨子、宋慥は此等の國君諸侯をして戰を止めしむるに骨折つたのである。其の他の學説も目的は國君諸侯にあつたのである。人民が戰を好むから之を止めしむる爲めに説いたものではない。然し平和を好む性質は支那人民の先天的性質であつて、此等の學者學説は支那人民の此の性質を代表したものであるとは直ちに考へることが出来ない。私はそれよりは此等の學者學説は、支那の人民が支那の徳治主義の政治の結果、自ら發達したる自治の組織を擁護する爲め、後天的に政治の弊害、戰爭の禍害を避け様とする平和主義になつて居るので、戰爭を止めなければ人民の心を得ることが出来ない、人民の心を得ることが出来なければ國君諸侯として人民を治むることは出来ないと言ふ様に、治人の要術として説いたもので、支那人民の戰爭の禍害を避けたいと言ふ後天的の無抵抗平和主義を迎合したものであると考へる方が適當であると思ふのである。